

第6回留学報告書

留学三年目は論文を多く書く機会に恵まれた期間でした。プログラムとして三年目に1本、二年目の専門科目の授業のタームペーパーや専門分野の論文をこの夏までに提出することが求められました。論文を書き上げる時に、完全に満足いく結果ではないけれども論文としてまとめなければならない状況はしばしば起きます。特に今回のように締め切りまでにそれなりの本数を書かなくてはならない状況では、個別の論文で完全に満足いく結果が得られるわけではありません。そのような時に求められることは、手元にある結果を適切に評価し、他者に説得的に価値を伝えることです。何故この結果が先行研究と照らし合わせて、新しいもので、何故それが学術的に、社会的に重要なのかを論理的に記述していかなければなりません。アイデアを思いつき、新しいプロジェクトを始めることは難しいことではありません。しかし、論文としてそのようにプロジェクトを終わらせることは遥かに大変だと改めてこの一年で感じました。

NYUは私の研究分野の教員が豊富に在籍しており、ミーティングを重ね、ときに厳しいコメントをもらったりすることによって、論文の成果をシャープにしていくことが可能になっています。特に単著の場合は、指導教員や他の大学院生の前で発表をして、コメントをもらうことは論文をまとめる上で必須なプロセスでした。コロナの影響もあって、大学にくる学生や教員が少なくなっていて、そのようなインタラクションは以前よりも難しくなっています。コロナ前であれば、学生がアポなしで教員のオフィスに行き、研究の話をしに行くのも日常茶飯事な光景でした。ニューヨークではワクチンの接種がだいぶ進み、規制がかなり取り払われました。したがって、次の学期までには平常運転に戻ってくれることを願っています。

研究主体の生活にシフトした三年目でしたが、一年目や二年目の授業を受けることが主体だった生活よりもはるかに充実しております。ただ、それらの授業で得た知識を元に論文を書いているので、決して無駄な時間ではなかったように思います。今後も引き続き新しい授業を聴いて見識を広め、自分の研究に落とし込んでいくことを続けたいと思います。特に研究のステージに進むと自分の研究のトピックに集中しすぎて、視野狭窄になってしまいがちです。そうならないように常に新しいことを学んでいく姿勢を持ち続けていきたいです。幸い、NYUは私の分野の教員が多く、毎年のように新しい授業が開講されます。在籍しているうちに少しでも多くのことを教員から学んで行きたいと思います。

末筆ですが、財団からの日頃からのご支援に感謝申し上げます。時間的にも金銭的にも恵まれている今の研究環境で、日頃から新たなチャレンジをして、研究者として成長してまいります。